

---

# アポクリファスの古戦場：灰の大地/白き大樹

pandi剛種

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アポクリファスの古戦場：灰の大地／白き大樹

### 【Zコード】

Z4389Z

### 【作者名】

pandi 剛種

### 【あらすじ】

「ここはなに？現実？それともゲーム？」

今話題のVRMMOジャンルをpandiちゃんが襲撃ッ。ログイン画面を押せばいつの間にかそこはまるで異世界。触る木々は確かに実感できて風は冷たくおしつこが出そつ。そんな現実のようなそうでないような、そんな世界に投げ出された少女の、ラスボスめがけて大前進が今始まる！

「戦え

戦え

争い

を叫び、その匂いに血を流せ

「うつむきー！熊が喋るんじゃないわよクソが！」

## 序章・悲しみ少女の言ひ（棒読み）（前書き）

とこりわけアポクリフアスちゃん出番よ。

「まじかよ……」

とこりわけで今日から少しずつ書いていきます、夜中だけ。よろ

しい（\*、\*、\*）

## 序章・悲しき少女の叫び（棒読み）

子供の時、父と母が列車事故で死んだ。

五歳の時だつたと思う。

一人つ子だつた私は、当然父と母と一緒にあの列車にいたはずだ  
つた。

だけど死んだのは父と母だけだつた。

父は私の上におぶさつてくれていた。

母はずつと私の手を握りしめていてくれていた。

なんでだろう。

なんで、私は生きているのだろう。

そう考える暇もなく、時は過ぎていき、程なく私は六歳の時に別  
の老夫婦に預けられる事になつた。

やつたねレナちゃん家族が増えるよ。

と言つた具合だつたのだが、今度はそのおじいさんとおばあさん  
が死亡。

死因？

餅を喉に詰まらせて、病院送り。

そのまま一ヶ ロコと笑つてあの世に行きましたとさ。

いやいや。

いやいやいや。

おかしいでしょ。

なんで笑つて逝けるの？

モチ詰まらせて頭回つてなかつたでしょ。

何？脳内物質でも回つてるわけ、老人がアヘ顔晒して文字通りぽ

つくりと絶頂しちゃつたわけ？

バカにしてる？

いやいや、だっておじいちゃんの最後、シーツにテントはつて  
んん そうじゃないわね、そうじゃないの。

私が言いたいことはそういう事じゃないの。  
なんで私の周りで親しい人達が死んでいくの？

ああ、可哀想な  
んん。おじいちゃんは、そんなに……親しくなかつた……か

な？  
ううん、親しかつた。

ここ断定しておくわ。でないと独白が続かない気がするもの。

おかげで学校では、私は死神扱い。

「死ぬぜえ、私を見た奴は皆死ぬぜえ」

「キヤアアアアア、レナちゃん格好いいいいいい」

「おら、男子どもジユース買いに行きな。でないと死ぬぜえ」

「キヤアアアアアア！」

うん、死神扱い。

OMだつてこなせるレベルよ。

そんなわけで そんなわけで、私の心は幼いながら、とても  
……とても歪んでしまつた。

可哀想な私。

例えるなら、渦を描いて天に向かつてそそり立つう この如き捩  
じれよう。

うぬ、立派な聖帝十字陵であるな。

そんなセリフが聞けちゃうレベルの捩じれよう。

哀しい。

私は哀しい。

「オーウ！ナンチューコト！スッゴイカワイソ！  
え？  
え？

ううん、何も聞こえない。

聞こえないわ、何にも聞こえないの。

私のログには何もないわ。

そんな私がMMOに入り浸つて何が悪いというの？

## 学校に行け？

## クラブ入れ？

お友達と仲良く帰つて帰りに喫茶店でも寄つて周りの女の子とキヤツキヤウフフしちゃうよ？

何それ怖いわあ。

彼氏？

彼女申請のメールの方が多い現状でそれはないわあ。

## 気持ち悪いわあ。

ナイスエクストラスリムバティ 中学生美少女が街中歩いている

で言つた、誰も声掛けないもの

卷之三

一〇二三

卷之三

道に迷ひ、やがての異常な、何かにかじれるつづみのサドベ、やがての、

二十九日正午、三木川堤防に沿ひ

卷之三

か言われる立場ばかり。

私を、私を女の子として扱つてください。

私を女の子として扱ってくれる空間をください。

私を女の子にして

いやあんた女の子  
じゃないかもね」「  
クソが。

くそつたれな流れ星に願いを込めつつ、四度目の老いた家族の員として、炊事洗濯家事親父といった具合一通りのことをこなす。そして夜な夜なテレホマンが登場しそうな時間帯で、MMOをこ

なす。

私が女の子でいられる時間はここだけ。  
今だけ私は女の子なのっ。

『お前ネカマだろキメエ。レスタに呼ばれたので移動しますねへへ；  
；』

クソガ。

今日も今日とて私は居場所を探す。  
私が女の子で居られる場所。  
私がお姫様でいられる場所。

あ、ニコ生とかうちのシマではノーカンなんで。  
正直MMO自体はそんなに経歴があるわけではないのだが、それ  
でもいつか自分の大切な居場所を見つけられると信じてる。

信じて

「ん？」

『アポクリファス戦記

大したネーミングじゃない。

だけど心は惹かれた。

まるで魂がグイッとディスプレイに引っ張られていくような、ロ  
グイン画面を見ているだけそんな感覚になつた。

ログイン画面には、二つの首を持つた巨大な灰色の熊が見える。  
広がる大陸。

砂漠、森、山、海。

青空、そして太陽つ。

ありふれている、だけど見れば見る程画像とは思えないほどに、  
生き生きとしているようだつた。

面白そう。

心が小躍りする（阿波おどりです）  
行こう。

ここなら私の、私だけの居場所が見つけられるかもしれない。

私が女の子でいられる場所が。

「いやすがに無理やろ」

うつさい流れ星は喋んなクソが。

そんな事を考えつつ私、ナイスバディの中学生、速比売レナはその『アポクリファス戦記』にログインすることにした。

これが、私の、人生で最初で最後の

「え？」

VR MMOになるともしらず。

アポクリファスの古戦場・灰の大  
地／白き大樹

森の中で私は全裸（前書き）

着工口は他の何よつて勝る宝

# 森の中で私は全裸

森の中。

## 綺麗な空氣。

私は裸

森の中

ほかほか日和

私は裸

喉がすりきれんばかりに叫んだけれど、せいきまで着ていたはずのペジヤマはダーニもなかつた。

私の身体には體につかでなかつ。

レーベンの「死の歌」は、死を歌う歌である。

それ以前に周り木ばつかりですやん。

木と木の間鬱蒼とした暗闇が続いていて、ホント一寸先まで見えやしない。木漏れ日は確かに気持ちいいけど。

うねあ 下の毛が木漏れ日を照り返しているカリイ（今モサイケの

最惠。

ホント最悪ですわ。

こわい森の中

しゃれに抱擁しながら密してた止むに止むの甘なのね

ん  
ん  
?

なんで私森にいるの。

جامعة رايموند

私なんでこんな所にいるの？

それでネットで『工口画像

Zip』つて検索ワード打つてて、

それで偶然面白いネットゲームを見つけて。  
意識を吸い込まれて、気が付いたらここにいて。

「 そつか。これ夢か 」

うん夢だ（今モザイク掛け終えました。今後ともよろしく）（＊、＊、＊）

夢にしてはなんやすんじいリアルですけど、正直それはアレです、  
正夢という奴だと思います。

足元の草がはだしで歩くたびにチクチクして激しく痒いけど、こ  
れ夢ですわ。

痒いだけ。

痛くないの。

多分向こうの私はあまりのむず痒さにベッドの上で〇〇をボリボ  
リしてるところだと思うの。

うん、試しに額を近くの木にぶつけてしまふ。

「 ハア…… フンス！」

折れた。

ガーッガーッガーッ

私のおんぼろ家ぐらいありそつなぶつとい幹が根元から折れて、  
地響きと土煙を上げながらゆっくりと倒れていく。

ドオオオオンッ

ギャアギャアッ

枝葉が地面をドラムのように打ちたたき森の獣がその騒がしさに、  
泣き喫き、私も泣きそうになる。

すんげえ頭痛い。

プクツて額膨れてる。

膨れてるだけ。

何？

私の額には鉄板が仕組まれてるの？

リアクティブ装甲の？

額に鉄板？

どんな設定よ！今時奇抜すぎてさすがにお腹いっぱいな素麺ライダーでもそんな改造設定でてきたためしがないわよ！

何  
これ  
?

何これええええ！？

「ここは戦神アホケリアスが女神アラマの古戦場だ」

泣きそうになりながら身体を折れた巨木の幹の裏に隠しながら、私は恐る恐る声の主を田で追つた。

う、浮いてる……。

お、おつまみが浮いてくる。

女の人（おとめ）が森（もり）の中（なか）、ふわふわと私（わたし）を見下ろし、ちょっと胸元（むこう）の開いだ服（ふく）がひらひらと舞つていてる。

おつぱいもフルンフルン風に漂っている。

どうしてこの事なの?

これが巨乳を極めし者の業だとでも語りの？

ハ  
ル  
セ  
ン  
ブ  
ラ  
ン  
?

あれ……つくりも

「本当にお越しくださり光榮でござりますお客様。ですが残念なことにここは戦神アポクリファスの魔力により、魔物が跋扈する地となつております。

お客様には、大変申し訳なく思しますね。」

卷之三

卷之二

もしかして心の声が聞こえる？

おこわいのわっぱい。

やつぱり貴方のソレってつくり

「いい加減にせんとすり潰すぞ穀潰しが」

「はい。レナちゃんにこそこねしおすい」

「『アポクリファス戦記』では、お客様

「ここ『アポクリファス戦記』では、お客様にリアル感を追及していただくために、特別にログイン画面をクリックしていただくと、お客様の魂を自動で抜き取る作業を行わせていただきました。これで魂は、この世界に封印され、いつまでもこのゲームを楽しんでいただけますよ。」

無料で読む「世界の歴史」

「ですが、身体はそれほど立派なもの为您提供できず、お客様のその

貧相な身体をベースに「ペーを作成することに相成りました」

ああ！

「黙つて人の話聞けやクソ虫が」

111

第十一章

これが私の今の全て。  
長いものには巻かれるのが私の通り。

卷之三

## 絶対アレつくり

ですがご安心ください。そんな貧相極まりない身体を守るために各ユーザーには初期装備としてあるものが手渡されることになつて

ます」

「はあ……」

「正直貴方みたいなキュッキュッキュと花瓶を拭く音が聞こえそうな体格の持ち主に渡すのは心底嫌なのですが」

「うわあ、心の抉れる音がする」「ですがこれも規則、仕方ないですが、渡しますので取りに来てくださいね」

「なんでそんなに渡すのがいやなの？」

「だつてあなた下の毛にティッシュ」

「取りに来ますのもうやめて死んでしまいます」（モザイク準備

中）

私は言われるままで、その宙に浮くマジカルおっぱいの下に身体の局部を隠しながらそろそろそろと近寄った。

「隠すものあるんですか？」

「初回の紹介アナウンスがなんでそんな失礼極まりないんですかあ！？」

「これも『アポクリファス戦記』の魅力ですよ」

「ユーザー離れますがあ！」

そう言いながら、私は両手を差し出す（あ、モザイク置いてきた）手にしたのは、大きな黒光りして太くて、腕なんかすっぽり入りそうな空洞がある、何か大きなものだつた。

テラテラと表面が光つてゐる。

綺麗……（モザイク拾つてきたよーよよー）

先端は手の指の形をしてゐるみたいで、これが腕にはめるものだつてすぐに私はわかつた。

で、早速つけてみるとあら不思議。

「おお、かつちり嵌まるじゃんつ」

そう言つて木漏れ日、は先へし折つてもうないので日差しに照らしてみれば格好いいガントレットが私の手に装備されている。

と、黒いガントレットの表面が紅く光り始めて、紅い線が表面にまつすぐ走る。

それは手の甲に浮かぶ紋章まで走る

「あ、それ貴方の『命』です」

「……ヒットポイントって事？」

「くわしい事はその固定装備、B・A・S・Eシステムにお尋ねください。じゃ私これでえ？」

「もう帰らなこと。月9のドラマ始まりますしおやすじえ？」

いや、何それ？

私もっと大切なものもらってないんだけど。ていうかこういうゲームって普通は、普通はあるはずの装備というか防具というか。

「服、貰ってないんですけど」

「野猿が服着るとか、おかしな事いこよる」

「やかましいわあー！さつさと服ぐださこよおおー！」

「それは装備です。私はそのようなものを渡すよつこは言われていませんので。自分で調達して、自分で戦つてくださいね。あ、この世界死んだらそれまでですの。覚えなくていいけど」

「ええええええええええええ！それすつごに重要だね、なんで最後に言ったの？なんでそれ最後にさらっと流したのぉおおおおー！？」

「あ、もつすぐドラマ始まるわあ。んじやばいせりや」

「古つ！ 感性が昭和並みの掛け声を今聞いたわあー！」

と、そんな事を言つていたら、フワフワ（それにせも）お

つぱいのお姉さんが空へと昇り始めていく。

「ま、待つて！待つてよせめて死んでもいいから服ちょうどいい、服ぐだせこよおおおおー！」

「この世界は呪われてしましました。アポクリファスは、怒り狂い世界を滅ぼさんしています。

「どうか勇者よ、私が与えた力と共に世界を救つてください」

「何中途半端にプロローグ喋つてゐるよ！ていうが今日田田最近の勇者だつて防具装備してなくとも服着てるわよー！」

「お願ひします。どうか世界を……！」

「何なのこの待遇！？お願ひだから服ぐださこよ、何でもしますか

らオナシャス！」

「ん? 今何でもするつて言ったよね」「

叫び声を上げながら、それでもおひさまにババアは止まらないか【H】くと

上がつていき青空に溶けていく。

第一回 亂世の始まり

卷之三

と放り投げられた。

死んだらそれまで。

厳しい条件ばかりが見える。

多分、筆者は少なくともこの周りにははなしのたぐい

普通のMMつのラヌボヌはゲー

「世界ではどうなんだ？」

出で立たぬのたゞ一か

アラビア語の文法

モード

考えたつて服が湧いてくるわけじゃない。

近頃たまに、外へはなし

足の裏の痛みも、

足の裏の痛みも 肌を擦す冷たい風の感触も  
ケーブルエクスプローラー  
だとしても全て私の中では現実。

なら簡単。

全部ぶつ飛ばして前に進むだけ。

嫌いなものも苦手なものも好きなものも全部ぶつ飛ばして、出口を、答えを探しに行けばいい。

深呼吸して……心落ち着かせて、それから深呼吸してからの

……！

「ヨガファイア！」

いつして、私の異世界冒険が今始まった。

帰る日はいつになるだろう。

そんなもん、帰れる日になつたわかるし、今は進むだけ。

さあ、行こう。

青空の下全裸の美少女がケツ丸出しで、ノシノシと草むらを踏みしめる。

最高のショコヒーローションだと思つた。

森の中で私は全裸（後書き）

あ、これR-15指定つけるの忘れてた(\*、\*、\*)ちよつとだけ暴走しますが、お楽しみいただければ幸いだいじわる

追記：つけた(\*、\*、\*)

お師匠の話では、約3000人近い人達が拉致されたらしい。

『アポクリファス戦記』

架空のオンラインゲーム。

あるはずの無いものを触つて、この日本にいる一億万人の人々の内約3000人が異世界へと連れて行かれた。

魂だけ。

向こうで、異世界のパワー・バランスに適合する形でコピー・体は作つてあるだろうから、本体は必要ないはずだ。  
だけど拉致されたと言つた通り、身体もない。

皆、煙のようになえていった。

恐ろしい力だ。

だけどそれ以上に恐ろしいのは、それだけ人々を巻き込んで、何かを為そうとしているという事。

深い憎悪。

世界中の人間を呪うとする、恨み。

おそらく……何人死のうが、構わないのだろう。

必ず、事を成し遂げようと

『アポクリファス戦記』……アポクリファス。

争いを告げる

「……アポクリファス。君は……」

ここは速比売レナの家の前。

僕は、同級生の彼女の両親に呼ばれるままに、彼女の家にやつてきたのだった。

理由は大したことじゃない。

今回の依頼は簡単だったし、駆けだし探偵の僕にとつてはそれほ

ど苦労はしないと思つたからだ。

何より

「レナちゃん……どうして……どうしてビビもいないの……？」

「帰つてきておくれ……わしら何でもするから……お願いじやから」

「レナちゃんが笑つてくれないと……ワシら生きている意味がない

んじや

「お願いじや……帰つてきておくれ」

泣いている年のいつたご両親の涙ながりの話を聞いた時、どうし  
ょうもなく胸を締め付けられた。

助けよう。

困つた人々に笑顔を取り戻せるのなら、僕の拙い呪術、使つに安  
いものだ。

お師匠も、大婆様も快諾してくれた。

「いっちです……レナちゃんのお部屋は」

「レナ……ワシらがいやになつたのか？ワシらが……いかんかつた  
のか？」

彼女の部屋に導かれるままに、僕は彼女の小奇麗な部屋を見渡し  
て、驚きに目を見開いた。

整つたベッド。

本棚は綺麗にまとめられている。

机はノートパソコンがあり、傍には既に終えた数学と英語の宿題。  
部屋は毎日掃除しているのか埃なんて目に入らなかつた。

とても、とても綺麗な部屋

学校では中々に荒くれ者で、教師でも手のつけられない彼女だが、  
家では本当に優しい少女だつたようだ。

その上、隠れて勉強でも常に上位につける優等生。

勉強も出来て、スポーツは万能。

本当にすごい女の子だと、僕は思つ。

ただ、その性格はちょっと捻くれているのだが。

「」

私は少し、部屋の空気を吸い込む。  
彼女の足取りを匂いで追う

(……そこか)

僅かな匂いを追いかけ僕の目に入ったのは、少女の机の上にある  
小奇麗なノートパソコンだった。

匂いは、画面の奥へと続いている。

その向こうに、『異界』が広がっている。

未だにノートパソコンは、電源を切られ充電コードを抜かれても、  
延々と画面に明りをつけ続ける。

そこが異世界の入り口だと知らせるように

「水樹君。そのトレンチコート重いだろ？ 少し脱いでおくかい？」

「……。おじいさん、おばあさん」

「ん……なんだい水樹君……？」

「今から、レナさんを助けに行きます」

「ほんと……ほんとかい？ レナは助かるのかい？」

「必ず」

「レナ……レナちゃん……！」

その場おばあさんは泣き崩れる。

僕はそんなおばあさんに小さく会釈をすると、再び明りのついた  
ノートパソコンの前、彼女の勉強机に向き合った。

彼女を助けるために必要なもの。  
まずは彼女の身体。

そして彼女の魂。

その為には、約3000人の身体が安置されている場所を見つけ  
なければならないだろ？

それはおそらく、アポクリファスが持つている。

(……そして、魂)

この異世界で、彼女はどうで何をしているのか。  
行こう。

「……展開せよ、召喚の六芒星。現世と異界を繋ぐ柱となれ」

アポクリファス……そこまでして君はオルカを……。

足元に浮かぶ白い印字。

それは星の様な形となつて床全体に広がり、やがて壁を伝い、天井まで這い上がつていぐ。

ドクン、ドクン……

まるで生き物のよう、空間が鼓動を始める。

そして、文様が明滅を始める。

部屋全体が『異界』となる

「……おばあさん。部屋から出てください」

「は、はい……」

捩じれ始めていく部屋の景色。

明滅する紋章の浮かんだ部屋の隅に座っていたおばあさんは、戸惑いながら部屋を後にしようとする。

「……あの、水樹君」

「はい？」

振り返れば、そこには開いたドアの向こうで戸惑いがちに話しかける速比売さんのおばあさんがいた。

「……レナちゃんはね……本当は優しい子なの……引き取られた先で次々と里親がなくなられて引き取る人たちもいなくなつて自暴自棄になつて。

それでも私たちに呴くしてくれて、笑顔をくれて、頑張つてくれて」

「……」

「お願い……何でもするから……レナちゃんを、助けて……私たち

の大切な娘なの」

「必ず、絶対に助けますよ」

「……ありがとうございます、水樹君」

閉じる彼女の部屋の扉。

密室が完成すると共に、『異界』の扉も徐々にだが、開き始めて

いく。

フワリ……

足元から噴き上がる冷たい風。

部屋に浮かんだ光の文様の向こうから、この世界とはまるで違う世界の匂いを、風が運んでくる。

この先に、彼女がいる

（……お師匠。大婆様。崩天の呪術師、水樹幸一。人助けに行つてきますつ）

心の中でそう咳き、僕は床を蹴つた。

お師匠がくれたトレーニングコートが噴き上がる風に煽られ、身体が僅かに宙に浮いて、重力に引っ張られる。

スルリ……

抵抗なく光の中に沈んでいく足先。

まるで床がなくなつたかのように、脚から胴体、そして顔まで身体全体が白い文様へと吸い込まれる。

視界が白く染まっていく。

（アポクリファス……速比売レナさん……）

その光の中に、僕は灰色の大地を眼下に見下ろす

何者？って思う人はノクターンに入ってる『闇の奥の奥に』を読んでね（＊、＊、＊）漢p a n d iとの約束？でもちっちゃい子は読んじゃダメだぞ？、ちっちゃい子とワンコ（力強い雄に限る、雌？そらもう滅却よ）はおじさんほいに子こい子しちゃおつか（ノ）・瓜（バ）

## 獣の眼光・効果／行動値を1つ増やします

「いたつ……くそつ、血が出た」

「ぶつくさぶつくさそんな事言いながら、可哀想な私は森の中をトボトボと歩いている。」

歩けば棒に当たるとは言わんが、所々に木の枝が飛び出たりして、その度にふくらはぎや太ももや にあたつたりするんだ。

もう傷だらけ

太ももや なんでもう十字傷がいくつも入って、これで私も死神から日村豚芯ね。

声優も咳さんから真四さんに変わつて私も一本満足（フウフウッ！）

いやでもアレよね。

咳さん声はどう考へても十四歳の設定じゃなくて教師向け

「……教師、か」

そう言えば、ここに入る以前も大概生傷の絶えない生き方してきたなあ。

まあ教師なんて腐るほどなぎ倒してきたけど

宿題を、忘れた、だと？

許しなさい。それで鼻の骨だけで済ましてあげる。

貴様あ……それが教頭に向かつての物言いと言つつかあ！

私の方がお前より偉い人間だつて言つてるのよ、このバー

コード。

許さん！ やれ国語の花村先生！

笑止！ うぬに浴びせる拳は持たぬわ、貴様など…… 1  
ぐああああああ！

脚の一本で、十分だ。

うーん、この教師陣。

正直うちの中学校は、周りの教師よりも生徒の方が強い、といつより化け物が多かつたわよねえ。

というか、中学生がどうかも怪しい人達が多かつたけど。

ほお、学校一強い俺と……戦うと？

御託は要らん、さっさと掛かって来んか。それとも腰が引けたかちんくしゃ？

後悔するぞ？

させてやるって言つてんだよ間抜け、負けたらその ン  
切り落として部屋に飾つてやるよ。

ぬかしめる……行くぞおおおおおおおー。  
はあああああああああああー。

強かつたなあ、あのゴリラ。

あれ絶対中学生じゃなくて、どつか別の宇宙人よね。

まあ宣言通りに女の子になつたわけだけど。

まあそんな事を考へても仕方ない。

だつてここは学校じやないもの。どんなルールが適用され、どんな事態が起きるか正直予想ができないわ。

何が出てくるのやら

「……あ、そう言ひえば」

あの偽物おっぱいがくれたガントレット。まだいじつてなかつたわ。

つていうかあのおっぱい絶対偽物よね。

それもシリコンとか、そんなレベルじゃなくてはや水よ水。水風船を詰め込んでおっぱいもまれた時に「おっぱいビームッ！」「ぎゃああああ！母乳が口にいいい！」「母乳プレイなんて変態プレイを求めるからよバカが、それは母乳ではなくて特殊溶液、これを飲んだ相手の精子を牛乳に変えて、ンの長さを五センチ縮める。これでお前はおしまいよ…」「く、クソおおおー覚えてろよ偽物おっぱいがあああああ…」「悪は滅びた」（完）

.....。

なんだっけ。

そうそう、なんとかシステムって言つてたわね。

PDAみたいなものかしらね。

私はそんな事を考えながら、適当なところに脚を止めて紅く線の入った黒いガントレットを覗きこんだ。

「あれ……？」

紅い線が少しだけ縮んでる。

これは『命』、あの偽物おっぱいはそう言つてた。  
てことは、私の生命力が減つてる？

.....木の幹の根元に腰掛けながら、足元を見下ろせば、柔肌に浮かぶ小さな切り傷がいくつもあつた。

でも痛みはそれほどないし、多分それは大したことじゃ（.....そつ、か、その為のHP制なのね）

痛みは与えず、感じさせず、その代わり自身の生命力を『ゲージ』として振り替えておく。

おかげでプレイヤーは死ぬまで死をあまり感じることなく闘い続ける。

バーサーカー。

他者を顧みず、事故も顧みず、ただ闘い続ける人。

前にゲーセンで死体蹴りを何度も受けてさすがに切れたんだけど、そのプレイヤーが言つた事を思い出す。  
(いいじやん、あんた蹴つてるわけじゃないし)

そう言つ事じやない。

他者を思わなければ、自分のことを顧みれるわけがない。  
逆もしかり。

他者を顧みるのは、他者が痛むと知つてゐるから。  
自分が痛みを覚えることを知つてゐるから。

おそらく、この世界のプレイヤーは、殆どの人がリアル感を追求しながら、相手を顧みない人達が多いかも知れない。

おや、その先にあるのが

(……PK……あり得るわね)

実利を求めて、或いは快楽を求めてのビビッカは知らないけど、  
確実に人が敵になる可能性は孕んでいます。

まずい。

装備はおろか服すら持つていらない状況で、PC相手に戦える自信  
は正直ない。

さつきの怪力だつて、本物かどうかも怪しい。

使えるものは

「うーん……どうすれば?」

『マスター・レナ　　マスター・レナ』

「……喋るんだ」

私小学生じゃないけど、なんだかおかし気分。

とりあえず、ガントレットから聞こえてくる新しい友達の声に、

私は耳を傾けつつ尋ねた。

「あなた、誰かしら?」

『はいマスター・レナ。私はB・A・S・Eシステムです』

「略称?」

『戦闘の補助、および、物体索敵、および代謝促進を主な目的とし  
ています。他に様々な機能があります。

機能の詳細をお聞きになりますか?』

「はいを押します」

『サンキュー・レッナ』

「いきなり馴れ馴れしいわね……まあいいけど」

『まずは戦闘の補助から説明させていただきます。この世界、アポ  
クリファスの古戦場では貴方はまずクラスを選択いただけます。  
貴方の世界で言つなら、職業ですね。

つまりあなたは今、無職です』

「え?」

『無職です』

「いや……一回も言わんでもいいや……」

『む・しょ・く！ で』

「……生きててすんません」

構しませんよ。この穀漬しをいやでも生かし続けるのが私のお仕

四庫全書

あのおはいといしなんなんの待遇……

現在あなたは無職です

も二、いし……心が研にかぎり

が設置されておりまして、ハーゲン危険ですので。

逆を押さない森のシスターがいた。アンドリューも一歩

せん

「つまり一人？」

あなたのよこなひきこもりにはお似合いですね。

၁၀၅

外れない。

あの儀物おこはしから説明を愛にませんでした？これはあなたの

「あ、あれやつ♂は飼物なんだ

「それから、二つね」

トが全て吸収してます

「それ呪いのガントレットやなーですかあああああああ!!」

『やあ、僕はマッシュ。僕と一緒に冒険をしてみる』

## やがてししゃ門

『クリアしなけりゃいいじゃん』（いいじゃん）

違します、二三三！ケリアすれは外れるか、いし、ヤんて考え

るのをおもむかし-」

『はい、というわけで死ぬまで私と付き合つていただきます、マスター・レナ』

死ぬこと前提で話さんとしてえ！」

こんなウソくくりあるんで共にしないやしになしの?<sup>?</sup>

まじで？

じ、人格矯正システムとかないの？

『ほら泣いてないで。早く説明始めますよ?』

「……………」セーラー服の少女が、うつむき眼で、ささやく。

「なんですよ……」

『いわゆるスクリプト沸きつて詰つ奴です』

「二の戦闘説」

カサカサツ

『この森に数体敵が湧きます』

確かにアバニ。

気配が近い。

じかも近づいてゐでしょ

こっちを見ている。

私は慌てて口を塞ぐと、すぐさま立ちあがって地面を蹴り上げると出来る限り太い木を選んで、身を隠した。

そして、木の幹の影から草むらの敵意の源を覗きこむ

「ああ。あそこの影がな

「中々貧相な女でしたが、いやあ若くてペロペロしがいのありそ

な女でしたなあ」「

お詫びの言葉を口にした。おのれは一瞬だけ、心の中で笑った。

「やがれー。女をペロペロやっしー。つべロペロやんんだよー。」

「……。いや普通に飴とか？」

「うーんこのメンバー最悪や」

そこには全身が茶色い毛に包まれた、他のゲームじや獣人と呼ば

れそうな人達が四人程いた。

全員服を着ている。

刀山を登

あの顔、もしかして

わ、  
わ  
！

— १८८ —

二二

ドオオオンツ

(僭越ながら、ここから先は私が朗読させていただきます、よろし

( ( \* , , \* ) )

タタタタタタシ

支那の歴史

（三十六　一五〇　自分を身を隠すにいたるの草木で流星が降るが如き回数と速さで打ち抜いた）

（ええと、その力に耐えられる物は何もなく  
なつて、留め難い、この斧にてござらひ。

（四人の「ボルトは、その突然の獣の如きを

に目を剥いた)

（その方）の向こうには探していた  
であら、初の女が立っていた

(否)

（両腕をだらしなく垂らし前かがみに立ちつくす、その紅い目をした人影は、『魔物』であった）

九月一日

（……怖すぎねえな）

（えと…… 口から煙を吐き、四つん這いになり、女は巨木に空いた大穴を這い、三木の前こやつてくる。

少二重ノ里双り<sup>マツ</sup>、田ノ口<sup>ハタ</sup>ベノ

妙に早い足取りで、四人の二ホルトの前へと歩み寄る（ニヤニヤと笑いながら近づくその日は、獣の日だった）

（四人のゴボルトは確信する）

卷之二

(二二三) が新分科へ 3 項の長い向脂力何で 一 いさ  
まつ二つは皮 二つ二

「...」

「ふふつ…………逃がさない…………！」

（逃げていく三人のコボルト達）

（そう言つて化け物は親分格の「ボルト」の首根っこをひつつかむと、ちらう一二三の親分を持つ「モモミ」はなーか）

（一歩一歩に爆弾がさく裂したかのような足音を立て、女は三人の

コボルトを追いかけ、近づいていく（

（ファンファンファンと片腕を大きく振る音が、森の暗闇の中近く）

(爆音の如き足音かどんとんと氣をすり拂にながら近づいてくる)

（指揮者）アーヴィング・シナフスキー、（作曲者）アーヴィング・シナフスキー

「」

(悲鳴が遠のいていく)

（一人が捕まつた。残りは一人）

（再び遠く、巨木連なる森の闇の深みから聞こえてくる激しい足音。

ズルズルと何かを引きずりながら走つてくる）

（だかさすかに）一人を捕まえたままなのか、速度は遅くなり足音は徐々に遠のく

(撒いたか)

(やつたか)

「お新分……子分……」

「モブでしょおし

( せりぬきながら、遠のへ鮮 )

互いに互いを賛美しあつた）

「それで森の奥へと迷いが隠れ……」

(頭上を覆つ、影)

「ひいいいいいい！」

କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା - ୮.

(全裸の女が頭上の木の枝を伝い、両手を広げて立っている)

(その日は、暗闇の中にあつて)

(まるで、獸であった)

「丁八口也。」

（明続終了。）「静徳」あつがい（ハ）（ミ）（井）（川）

(引き続き、ゴリラ女の暴走特急、お楽しみくださいね(\*^\_^\*)

六



獣の眼光・効果／行動値を1つ増やします（後書き）

予想外に早くうつりてきて僕満足（＊、＊、＊）でも誤字も多一し、なにより暴走してゐるから気をつけて読んでね。この小説は瘴気が充満していますから

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4389z/>

---

アポクリファスの古戦場：灰の大地/白き大樹

2011年12月16日19時48分発行